別府不老町教会　研修会　　　　2023年7月23日13時～15時　　関川泰寛

「教会の土台について考えるー健やかな教会形成と伝道の進展のために」

１　教会の土台

　マタイによる福音書16章13節以下には、フィリポ・カイサリア地方に出向いた主イエスと弟子たちの会話が描かれています。主イエスご自身が、弟子たちに「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになると、弟子たちは、「エリヤ」「エレミヤ」「預言者の一人」などと、人々の噂を口にします。すると主イエスは、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問いかけました。

　この問いかけに弟子の一人シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。すると主イエスは、ペトロの答えを祝福して、「あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる・・」。

　古来、この主イエスの言葉は、教会の土台を示す言葉として理解されてきました。ローマ・カトリック教会は、ここでいう「岩」とは、ペトロという人格であると解釈し、ペトロから始まる歴代のローマ司教（教皇）を、天の鍵を授かった唯一の「神の代理人」と見るようになりました。

　１６世紀に始まったプロテスタント教会は、このようなローマ・カトリック教会の聖書解釈を批判し、「岩」とは、ペトロという個別の人間を指すのではなく、ペトロの信仰告白、あるいは信仰告白するペトロを指すと考えるようになります。それ以来、プロテスタント教会においては、教会の土台は、ペトロから始まって天の鍵の権能を受け継ぐ教皇個人にあるではなくて、イエスをキリストと告白するペトロの信仰にあると理解されるようになります。

さらに広い意味での改革教会の伝統では、教会の土台とは、固定化された信仰を言い表す文書というよりも、各時代に伝道と教会の形成の戦いの中で告白され続けてきたキリストへの信仰であると考えられるようになり、時代ごと、地域ごとに新しい信仰告白が生み出されていきます。わたしたちが重んじている古代の信条、宗教改革の諸信仰告白、そして現代の信仰告白などは、落ち葉の積み重なりのように考えられて、教会の信仰の遺産とされてきました（関川他『改革教会信仰告白集』教文館参照）。

キリストへの信仰は、同時にキリストの父である神とイエスは主であるとの告白に導く聖霊への信仰でもあります。言い換えれば、教会の土台は、父と子と聖霊なる神への信仰ということになるでしょう。聖書もまた、父と子と聖霊なる三位一体の神を告白している文書という意味で、神から与えられた信仰告白そのものです。

　教会は、どれほど小さな群れであっても、生けるキリストを告白することによって、教会になるのであり、どれほど立派な歴史や財産を保有していたとしても、キリストの告白を止めてしまえば、教会でなくなってしまいます。キリストへの告白によって、教会は立ちもすれば倒れもします。三位一体の神への信仰を「公同信仰」と呼びます。古代の教会の諸信条（使徒信条、ニカイア信条など）の信仰内容が「公同的（カトリック）」と呼ばれ、すべての教会が受け入れ、信じる普遍的なものです。

　マタイによる福音書18章20節にあるように、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」と主イエスが言われる通りです。主の名によって集まるとは、主の現臨を信じて集まるということです。主の現臨を信じるところには、天に挙げられた生ける主が、そこにいてくださり、教会を成立せしめてくださいます。

　私たちの教会は、土台のしっかりしたところに建てられる必要があります。土台というと確かに、私たちの足の下にあるもののように受け取られますが、実際は、教会の土台は、天にあります。復活し高挙された主イエスが、万物の創造主である父なる神の子であり、父と子とともにあがめられ、私たちに注がれる神御自身の力が、聖霊です。父と子と聖霊なる神は、天上で豊かな交わりを持っておられます。教会の土台とは、ご自身のうちに交わりを持つ三位一体の神という天上におられる方を土台としているということです。

残念ながら、現代の教会は、聖書と信仰告白という土台よりも、活動や交わりの楽しさ、牧師のカリスマや能力などの確実性を土台としようとする傾向があります。それでは、真の教会は歪んでしまいます。教会は、自分の足下にあるものを土台とすることはできません。教会の土台は天にあります。教会が教会であり続けるためには、教会がそれ自体では無価値であること、キリストを証言することによってのみ教会であることができることを忘れてはなりません。

２　教会の土台を明らかにする説教と聖礼典

　宗教改革の時代から、真の教会のしるしは、「み言葉の純粋な説教と聖礼典の正しい執行である」（アウグスブルク信仰告白第7条）と言われるようになりました。当時のローマ・カトリック教会は、ローマ教皇を頂点とするピラミッド型の位階制度を構成する聖職者の群れを教会と考えました。しかし、プロテスタント教会は、すべてのクリスチャンが祭司として、人々のために執り成し、奉仕と讃美の生活を送るべきことを唱えました。「万人祭司」「全信徒祭司制」と呼ばれる教会の在り方を提唱しました。

　加えて、プロテスタント教会は、1６世紀まで長きにわたって続いてきた修道院制度を廃止し、世俗生活の中で、与えられた職業を神さまの召しと考えて、どこにあっても、神の栄光を表すことを第一にする生き方を提唱しました。ルターもカルヴァンも「神にのみ栄光（soli deo gloria）」を大切な合言葉としました。家庭や学校、国家の在り方も、神のくださった秩序として、絶対化することはないけれど、創造世界の一部として重んじる姿勢をとりました。

　現代の歴史家が、ルターやカルヴァンなど主流の宗教改革者たちを、「俗権提携型の宗教改革者magisterial reformers」と呼ぶのは、世俗の権威や秩序を否定して、独自の集団を組織する急進改革者と区別するからです。

　剣と聖書をともに掌中にしたローマ・カトリック教会の首長である教皇に対抗して生まれた宗教改革の諸教会ですが、やがてプロテスタント教会の中には、今度は、自分たちが俗権を掌握して、俗権を否定するか、あるいはそれを超えた存在として教会を理解する人々が出現して、プロテスタント教会内部で深刻な分裂が生じるようになります。特に宗教改革の時代以降、アメリカに渡ったプロテスタント諸教会は、自由の国アメリカで、自分たちの神学、統治、信仰に基づく、教派教会（denominational church）を形成していきます。明治維新によって開国した日本に伝道したのは、その大部分がアメリカの教派教会でした。1941年の教派合同によって日本基督教団が成立しますが、それ以前は、30余派の教派教会が存在していたことは、御存じの通りです。

　このように多様なプロテスタント教会の在り方の中で、私たちは、説教を通して、生ける神とキリストに出会い、洗礼と聖餐という聖礼典を通して、天のキリストの体と一つに結ばれて、永遠の命の約束に生きる自由な信仰共同体である固有の教会に属しています。

　こういうキリスト教会の在り方は、ヨーロッパで生まれ成長したプロテスタント諸教会が、17世紀以降、新天地アメリカに渡り、そこで今説明した教派教会としてさらに成長し、制度を整えて、確立していったものです。アメリカで拡大したプロテスタントの教会は、国家という世俗権力とは結びつかず、政教分離の大原則の下で、自由に伝道し、形成されるものとなりました。

　私たちは、自分たちの在り方を、自分たちで決定し、教会の権威や自律を重んじますが、同時に教会のメンバーは、市民社会の一員として、社会や世界の秩序に信頼しながら、市民として生活を行います。教会が、市民社会とは別に教育制度や政治制度、裁判制度を作るのではなく、世俗社会の一員として義務や責任、役割を負います。教会内の信仰や倫理に関しては、戒規の制度を設けていますが、教会外の問題と関わるところでは、政治や司法に事柄を委ねています。

　また信教の自由の確立された民主社会では、教会を含む宗教団体が特定の政党を支持して、民主主義の意志決定に参加することは自由ですが、国家や地方の権力が特定の宗教団体と結びつくことはできない仕組みになっています。

　そうしますと、ますます私たちは、私たちの信仰や共同体のアイデンティティーをしっかりと意識しながら、信仰共同体を成り立たせている土台、基礎は何かを自覚しながら、教会生活を送り、伝道することが大切になるでしょう。プロテスタント教会の土台は、み言葉が純粋に説教され、聖礼典が正しく執行されて、生けるキリストが常に指し示されていることです。

３　健やかな教会の形成のためには、牧師と長老会（役員会）が、同じ方向に心を向ける

　讃美歌二編の1番に「心を高く上げよう」という歌詞の讃美歌があります。この言葉は、3世紀はじめのローマで用いられた聖餐の式文の言葉に由来します（ヒッポリュトスの『使徒伝承』中のアナフォラと呼ばれる聖餐の式文に出てくる言葉です）。ラテン語で、「スルスム・コルダ（sursum corda）」と言います。この言葉は、わたしたちの礼拝の本質を一言で表すものですし、聖餐がそもそもなんであるかを直感的に示す言葉と言えます。

　16世紀の宗教改革者カルヴァンもまた、この言葉を好み、教会の礼拝の言葉として用いました。「心を高く上げる」とは、復活されて天に挙げられた主イエス・キリストに目を向け、心すなわち私たちの全存在を天のキリストと一つに結んでいただくためです。

　神の独り子イエス・キリストは、私たちの救いのために、私たちの世界に来てくださり、私たちとまったく同じ肉体をとり、苦難と死をすべて引き受けてくださいました。つまり、神の御子は、「受肉」することで、わたしたちの肉の救いを実現してくださったのです。しかし、主イエスは肉体という有限で朽ちていく存在にとどまり続けたわけではありません。死んで三日目に復活されました。さらに復活の主は、皆の見ている前で、天に挙げられました。昇天という出来事が、キリストのご生涯の最後に起こります。キリストの昇天ゆえに、私たちは、天のキリストを仰ぎ、永遠の命とは、何か漠然とした期待や希望ではなくて、天のキリストの生命と合一することであり、このキリストに向けて心を高く上げることこそ、至福の喜びであると確信するようになります。

　地上に来られた主イエスにあれほど忠誠を誓った弟子たちは、主の苦難と十字架の現実には、目を閉ざしました。自分の地上での命が危うくなると皆一斉に逃げ始めます。弟子たちの惨めな姿を聖書は描きます。

　しかし、私たちは誰一人として、弟子たちと違った行動をとることはできません。私たちも地上の主イエスのお姿だけを見ている限りでは、滅びと朽ちていく現実から逃れられないのです。

　惨めな人間の現実を超え出て永遠を知り、至福を知るのは、死んで陰府に下った主イエスが、死に勝利して復活し、天に昇られた時です。さらに天にキリストは、私たちに聖霊を注ぎ、信仰と希望と愛に生きるようにしてくださいました。

　主イエスは、ガリラヤの野で、弟子たちに「野の花、空の鳥を見よ」と説教されました。美しい花、小さくても力強く空を飛ぶ鳥たちです。どれほど小さくても、神さまは、これらの生き物、いと小さきものたちを慈しみ、養ってくださいます。これらの小さなものとは、私たちのことです。でも私たちは知っています。これら美しく咲いた花は、いつのまにかしぼみ枯れていきます。小鳥たちは、寿命が来れば、地において、ひっそりと死んでいきます。これも私たちの姿です。

　これが、神さまに創造されたものの現実でしょう。しかし、心を高く上げて、天のキリストを仰ぎ見る者は、地上の生涯の先に、キリストと結ばれた生命に生きることのできる約束の言葉を聞き分けることができます。

　健やかな教会の形成のためには、牧師と長老会、そして当然のことですが、教会員一人一人が、復活して天に挙げられた昇天の主の方向に心を向けることが大切です。

　教会の礼拝は、説教と聖礼典を行うことで、この方向を常に指し示しています。3世紀の教会、16世紀の教会、そして現代の教会も、スルスム・コルダという祈りの言葉をしっかりと聞かねばなりません。

　残念ながら、この言葉の響きが弱くなっています。心は、自分の悩みに向きます。牧師の説教も聖礼典も、いつのまにか、天にキリストへと解き放たれて、自由を約束する喜びの福音ではなくて、内向きで、罪と悩みの現実にひっかかったままです。罪赦されて、自由にされた信仰者の喜びこそ、私たちの教会の喜びです。

４　伝道はどうしたらできるのですか。

　伝道には特別な秘訣はありません。伝道は、神ご自身が行い、導いてくださる出来事です。まずこのことを知り、神に信頼しましょう。私たちが伝道に参与すると、神の奇跡が起こります。使徒言行録が記す奇跡は、今も起こります。自分は何もできないと悲観する必要はありません。まず、教会の伝道が進みますようにといつも祈りましょう。つぶやくような祈りでも構いません。伝道の先頭に立つ牧師のためにも祈りましょう。そして、自分が礼拝に参加し、聖書を読んで感動した内容を親しい方々に伝えましょう。機会が来たら、礼拝に招きましょう。それらすべては、自分がキリストに捕らえられ、後ろのものを忘れ、前に向かって体を伸ばす時に起こります。今までがどうであったかは、伝道に関係がありません。ペトロやパウロの姿を思い起こしましょう。アッシジのフランチェスカはどうだったでしょうか。ルターもカルヴァンも、主に出会って、悔い改めて、伝道者や改革者になりました。

　「・・草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」とペトロの手紙（Ⅰ）1章２４～２５節は語ります。これは、イザヤ書40章6～8節の引用ですが、すべてのクリスチャンに告げられた福音の言葉です。　この福音に生かされるとき、私たちは、自分が新しい伝道者となります。牧師とともに伝道する同志となるのです。もはや教会の「客さま」ではありません。み言葉を聴いて、生きる者とされ、今度はそのみ言葉を伝えるものとなります。信仰の同志は、支え合い、助け合いながら、前に進みます。時には歯に衣着せぬ批判を互いにすることもあるでしょう。行き違いもあります。しかし、同志は、互いの課題に目をつぶることなく、時には悪にしっかりと対峙しながら、嵐の中でも船出していきます。

５　伝道は、一つの教会ではできない。諸教会との連携、祈り、相互応援が不可欠。

　日本の伝道は、明治以来なかなか進展しません。特に、コロナ以降の日本基督教団の伝道の停滞は、深刻です。各地の教会、長老会、牧師は、苦しみ、悩んでいます。伝道の停滞を突破する簡単な処方箋はないでしょう。しかし、祈りを持って試行錯誤、創意工夫を皆さんで行う中で、必ずや神は道を拓いてくださるでしょう。

　私たちの教会が行うべき第一は、み言葉の説教の改革です。これは、牧師が行うべきことと思っていませんか。しかし、これは教会全体の課題です。牧師の説教は、み言葉を聴く全会衆の姿勢によって、立ちもすれば倒れもします。

　一番大切なことは、み言葉の説教は、神の言葉なのですから、説教が語られるところに、神の御子主イエスが現臨しておられるという確信と安心が先立つという共通の理解を持つことです。牧師の説教は、もはや聖書の言葉の解説ではなく、聖書が証言する父と子と聖霊の神のご臨在を証言し、指し示す言葉となります。牧師の説教は、自分が期待する心地よい言葉ではなく、時に、自分自身の在り方を問いかけ、悔い改めを迫るものとなります。

　牧師は、常に自分の言葉を整えて、研鑽する必要があります。もし会衆が、牧師のお話を聴いて為になったとか、今日の話は新しい事柄を学んで有益だったとかというような感想にとどまっていたら、反省する必要があると思います。説教がなされる礼拝では、牧師も会衆も、ともに聖霊として臨在する天の主イエスに心を高く上げて、み言葉を味わい、心からの讃美と感謝をささげ、罪の悔い改めへと導かれます。牧師の説教で、会衆だけが罪の悔い改めへと導かれるのではありません。牧師も会衆も、主の前にへりくだり、謙遜になって、み言葉を上よりの恵みとしていただくのです。

　次に、洗礼と聖餐という二つのサクラメントもまた、そのように整えられているかを自己吟味することが大切です。毎月与る聖餐の意義を教会の皆さんで共有することができれば素晴らしいと思います。聖餐は、パンとぶどう酒を通して、2千年まえに生きた主イエス・キリストをただ単に想起することではなくて、恵みの外的な手段、つまり見える言葉であるパンとぶどう酒をいただくことで、天の復活の主イエス・キリストの体と一つにされること、主イエスと結合（unio）へと導かれることなのです。そのためには、私たち人間の力は何の役割も果たしません。ひたすら上からの恵み、聖霊の働きを願い求めます。そこで、聖餐に参与するとこには、わたしたちは牧師の司式の言葉とともに、聖霊を注いでくださり、「聖霊よ、来てください」と祈り続けます。

　このような真の礼拝のしるしである説教、聖礼典を等しく重んじる全国の諸教会との連携、祈り、相互応援が求められます。日本基督教団に属する1700の教会は、それぞれ教区や地区との交わりをも持っています。しかし、同時に同じ信仰や教会理解に立つ、諸教会と積極的に交流、交わりを行うこともまた、自身の教会の在り方を反省し、自己改革する契機になるでしょう。

　わたしが、奉仕してきた諸教会は、開拓伝道で生まれた泉高森教会、50年牧会した老牧師の後任として赴任した十貫教会、そして、現在奉仕している組合教会の伝統を持つ大森めぐみ教会と千差万別です。わたしが、それぞれの教会で実践してきたことは、規模や歩み、伝統は異なっていても、教会の土台についての理解を長老会、執事会、役員会が共有し、その土台の上に、教会の形成と伝道を行うことができるように、研鑽し、訓練することでした。この部分がぶれると、教会は、襲い来る嵐や洪水によって、あっというまに流されてしまいます。教会の揺らぐことのない土台とは、三位一体の神への信仰、説教と聖礼典を重んじているか、神以外のものを神としていないかということに尽きると思います。このような土台の上に築かれる教会は、礼拝においては「心を高く上げ」、すべてのわざにおいては、「神にのみ栄光を帰する」営みを続けます。

　揺らぎのない教会の形成は、教団、教区における教会政治的な課題ではありません。別府不老町教会と教団内の諸教会、それらの連携と伝道協力を通して実現する祈りと礼拝、神学的な課題です。したがって、本日のような研修や教会的な交わり、相互の応援が不可欠です。

６　さいごに、困難な時代にあって

ある書物に、ロシアの小説家ドストエフスキーの『地下室の手記』の言葉が引用されていました。「世界が消えてなくなるのがいいか。それともお茶が飲めるのがいいか。答えてやるさ。世界なんて消えてなくなったっていい、いつもお茶がのめさえすりゃ」。私たちの現実を言い当てている言葉です。極限状況の中で、孤独に追い立てられている人間は、世界の問題などを視野に入れることはないでしょう。ささやかなものに最大の期待と関心を注ぐはずです。お茶一杯は、生きる意味の究極的なシンボルのようなものです。コロナの時代に、ロシアとウクライナの戦争が始まりました。閉鎖空間の中で、ささやかな期待と希望に生きていた私たちは、突然、世界の終末の予感を抱くようになり、世界大の意識を持ちつつ、人間であり続ける意味の問いを投げかけられています。

聖書の世界は、コロナと戦争の時代に生きる孤独な個人と国家の問題を常に映し出しています。主イエスご自身が、神の国と神の義を求めよと語りつつ、ガリラヤの野に咲く花をさして、「野の花、空の鳥を見なさい」とも語りかけられました。さらにペトロの手紙（Ⅰ）1章24節は、イザヤ書40章7～8節の言葉を引用して、「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて草のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」と記しました。これらわずかな箇所を読んだだけで、聖書がコロナの時代と戦争の時代に人がどう生きるかを問題にしていることがわかります。キリスト教の文化と歴史は、これら聖書の言葉に触発されながら、終わりが迫ってくるような時代をどう生きるかという問いと格闘してきました。ドストエフスキーも、そういう格闘の只中に存在した小説家でありました。コロナが収束しつつあっても、戦争の終わりが見えない時代にどう生きるのかという問いへの答えは、私たち自身が21世紀に今この時、この場所で試行錯誤して答えを出すように促されています。おそらく簡単に誰かが答えを与えてくれるような問いではないでしょう。

しかし、簡単な答えはなくとも、時がよくても悪くても、主の言葉を宣べ伝えることが、わたしたちのつとめです。困難な時代だからこそ、祈りと力を合わせて、ともに教会の形成と伝道にあたりましょう。悲観的になる必要はありません。本日も復活の主に私たちは出会ったからです。